

色彩の心理 (五)

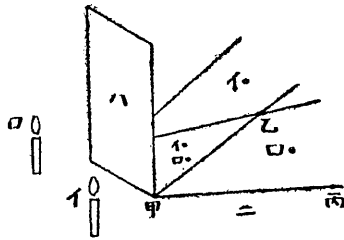
菅原 教造

二十三 色の對比の方法

對比の分類を説く前に、對比の現象を實驗する専門的でない通俗な方法を、二類數種に分けて述べる。第一類は光の對比を實驗する方法、第二類は色の對比を生ぜしむる方法である。(1) 光の對比の第一の方法は、既に第二十五圖の所で述べた。此の圖に示したやうな大きいものを備へて置けば、教授用の標本として、大勢の人にさせるのに最も適して居る。

(2) 第二の方法は、第二十七圖に示すやうに、二本の蠟燭又は二つの電球を以て、一つの衝立を照らして、二つの影を作り出して試みる實驗である。ハは影を生ぜしめる衝立、イとロは燭光である。イはイの光に依つて生じた影、ロはロの光に依つて生じた影、イロは此のイとロとが合して生じた最も暗い影。ニは全く影の無い最も明るい部分である。ロはロの光に依つて生じた影であるけれども、此の部分はイの光に依つても照らされて居るから、半ば明るい。

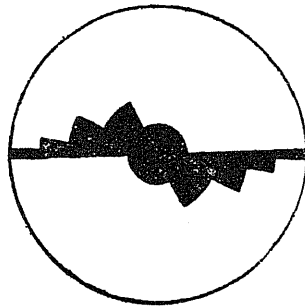
第二十七圖



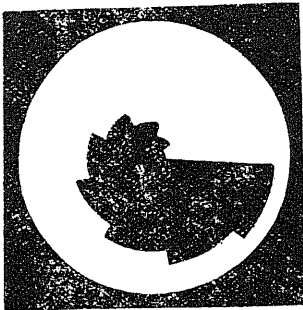
る、影となる。然るにイロはイの光にもロの光にも照らされないから、最も暗い影である。乃ちロの半明半暗の影の左には、甲—乙を境界にしてイロの最暗の影があり、右には甲—丙を境界にしてニの最明の部分がある。ロの影の甲—乙の境は、其左隣に最も暗いイロの影がある爲めに、ロの他の部分に比して著しく明るく見え、甲—丙の境界は、右隣に最も明るいニがある爲めに著しく暗く見える。日常生活に於ては食堂の卓上や、大廣間の襖や、演劇や寄席の舞臺等に於て、

此の現象のもつと複雑したものが屢々見受けられる。

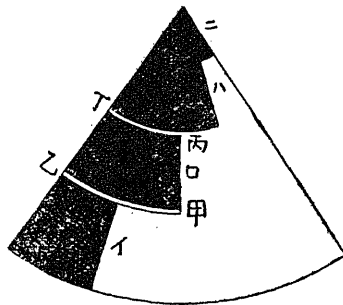
(甲)圖八十二第



(乙)圖八十二第



(丙)圖八十二第

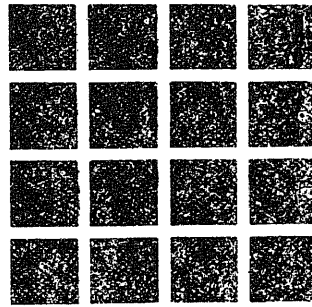


(3) 第三の方法は、第二十八圖の(甲)(乙)のやうな圓板を速く廻轉するのである。今此の方法に依る光の對比を、第二十八圖の(丙)に依つて説いて見やう。丙の圖は甲や乙の圖の中の一部を更に大きくしたものである。若し之を廻轉すれば、イロハニと云ふ四つの輪が、圓周より中心に向ふに従つて、追々に明るく成つて現はれる。今ロの輪を取つて見る。此の輪は、外の圓周に近い方の境界丙—乙に依つてイの輪に接し、内の圓心に近い方

—乙、丙—丁の溝は、説明の便宜上假りに設けたものである。此の關係は丁度第二十七圖のロの影の場合と同様である。即ちロの輪の甲—乙に接した部分は他の部分よりも暗く見え、丙—丁に接した部分は明るく見える。最も簡單で且つ面白い方法は、白い厚紙で獨樂を造つて、第二十八圖の甲又乙の圖を畫いて實驗する事である。

(4) 第四の方法は第二十九圖に示すやうな黒地に白の十字格子を畫く事である。黒と白との間に狭まれて居る線條の部分は、光の對比の作用に依つて白く明るく見え、白の十字が交叉した部分は、四方が白で圍まれて居るから、光の對比の作用で暗く鼠色に見える。

圖九十二第



(5)第五の方法は、前章に述べたやうに、白や黒の小さい紙を、白・淡鼠・中鼠・濃鼠
 黒などの紙の上に載せる實驗である。尙其他の方法もあるけれども、くだぐしいか
 ら略して置く。

二十四 色の對比の方法

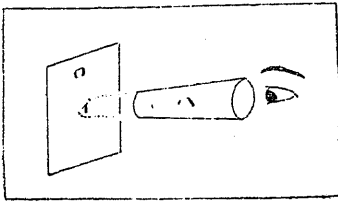
第二類の色の對比を實驗する方法もかなり多い——

(1)第一の方法は、第二十六圖(丙)に示したやうな圓板を造つて廻轉する事である。
 これはブリッヂ氏の方法と呼ばれる。

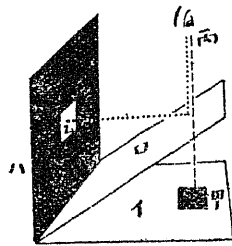
(2)第二の方法は、飽和した色紙の上に、鼠色の細い紙を載せ、其上を薄紙で被うて色の對比を
 生ぜしめる方法で、今から八十年前に佛蘭西のシュヰリール氏が研究したものである。此の方
 法は背景法とも薄紙對比法とも又、マイエル氏法とも呼ばれる『薄紙實驗用ハイデルベルク色本』
 として知られて居る美しい色紙の本を用るれば、此の實驗を最も明瞭に示す事が出来る。一般の
 心理學書や心理學教科書で色の對比を示すには、多く此の方法を用ゐて居る。

(3)第三の實驗は、第三十圖に示すやうに、半透明の色紙でハの圓筒を造り(色紙の裏に油を引い
 てもよし、又セセルロイドを白紙と共に巻いて筒を造つてもよい)、他方の眼を閉ぢ一方の眼のみ
 で鼠色の紙口を覗く方法である。此の圓筒内に現はれた鼠色の紙の部分イは、圓筒の色の餘色に
 見える。鼠色の紙口は位置をいろいろに加減して、之に當る光を或は増し所は減らし、其鼠色の
 明度を圓筒の色の明度と等しくする事が出来る。此の圓筒法はランドア氏の方法と云れる。

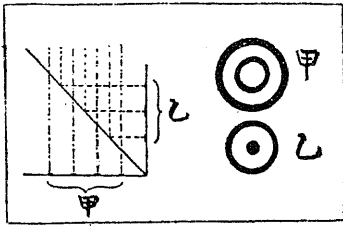
圖十三第



圖一十三第



圖二十三第



(4) 第四の方法は、第三十一圖のやうな装置をするのである。イは白い紙で、其上に甲と云ふ黒い四角形を畫く。ロは色硝子である。今丙から下を見れば、イの白い

紙は其硝子の色に見える。次にハは黒色の紙で、其上に乙と云ふ白い四角形を畫く。此の乙をロの色硝子に反射させ、ロの上で乙が甲と重なり合ふやうにしながら、之を丙から見下ろせば、此の四角形の色は（元來は硝子を透過して黒と、硝子に反射した白とが混するから、實は鼠色になる筈である——第十五圖参照）、ロの色硝子の色の餘色に見える。此の方法は古くは獨逸の大詩人で色彩論を著はして英吉利の物理學の大家のニュートンと争うたゲーテが試みたもので、鏡の方法とも又ラゴナ・スツィナ氏の方法とも呼ばれる。

第三十二圖は獨逸ライプツッヒ大學の生理學の教授ヘリングが第三十一圖の装置を改良して造つたもので、此の圖の右に示したやうに、前圖の甲即ち黒色の四角形は、此の圖では二重の輪(甲)になつて居り、前圖の乙即ち白色の四角形は、此の圖では蛇の目(乙)になつて

甲圖三十三第



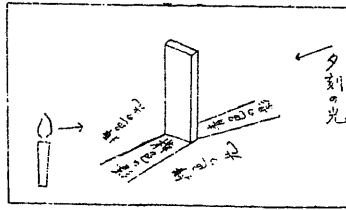
居る。此の左の圖は、やはり色硝子を用ゐて、甲の二重輪を透過する色と、乙の蛇の目を反射する光とで輪の重なつた對比が現はれる。

(5)第五の方法は、色の影の方法で、既に第二十二章の障子の棧の牡丹色の影や、貼り物の八つ手の淺黄色の影に其例を示した。此の方法はやはり古くはゲーテが試みたものであるが、ヘリングは更に之を改良して色窓(第三十四圖参照)を造

つて色盲の検査に用ゐたりした。普通に人の知つて居る色の影の現象は、夕刻電燈に照らされた白壁や障子に寫る影の色である。薄暗く急に寂しく成つたのに氣が付いて、電燈をひねりながらふと縁側の障子に映つた自分の影を眺める人は、第三十三圖の甲に示すやうに、誰でも影の色が思ひの外に青いのに驚かされる。

電燈の光の色は淡樺色であるから(此の事實は夕刻又は夜でなしに、晝の間に電燈を點じて其色を観察した時に、最もよく知られる)、其光の當つた障子の色も亦淡樺色でなければならぬ人物の影は此の淡樺色に塗まれてみるから、其餘色の勝色に見える譯である。但し此の場合には、色の對比の外に夕刻には白い物が一體に綠色・淺黄色・勝色を帯びて來ると云ふ事を考へに入れて置かなければならぬ。(後に説くブルキンエ氏現象参照)。故に此の場合には、色の對比とブルキンエ氏の現象とが複合したものと見なければならぬ。

乙圖三十三第



第三十三圖の乙は、此の現象をもつと遊戯的に面白く取扱つたもので、障子に映す影の代りに、立てた棒の兩側へ色の影を出したものである。其他夕刻白い窓掛に電燈の樺色の光を受けた時、窓掛の褶や折目の蔭が美しい青色を呈するものと同じ例に數へる事が出来る。

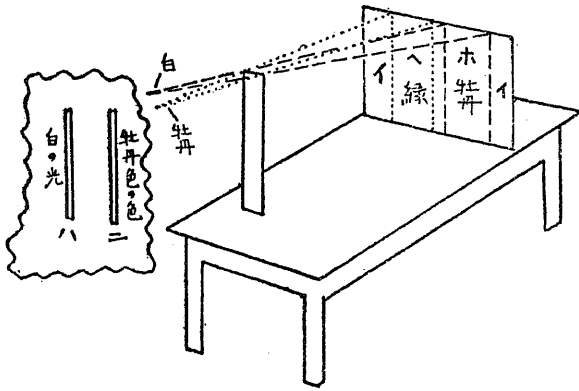
第三十四圖(甲・乙・丙・丁・戊・己)は、ヘリングの考案した色窓で、此の窓置に依れば、最も的確に明瞭に且つ美麗に、色の影の實驗を試みる事が出来る。先づ(甲)の圖解をしよう。暗室内の机の上に、イと云ふ衝立がある、之に色の影が現は

れる。ロは外から来る光を遮つて、影を生ぜしめる棒である。ハは外から来る普通の日光即ち白い光、ニは外から来る牡丹色の光である。此のハから来た白い光は、ロの棒に遮られてホの影を生じ、ニから来た牡丹色の光は、ロの棒に遮られてへの影を生ずる。衝立のイの所はニから来た牡丹色とハから来た白の光とが混じて居るから、淡い牡丹色になる。又ホの影は飽和した牡丹色になる。然るにへの影は飽和した緑色になる。何故にへの影が緑色になるかを説く爲めには、(乙)(丙)の二圖を用ゐる。

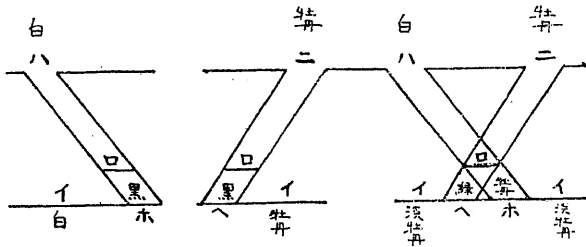
若し(乙)のやうに、ハを通つた白い光のみが来るとしたならば、イの衝立は白い光を受けロの棒に遮られたへの部分に黒い影が生ずる。又(丙)のやうに、ニを通つた牡丹色の光のみが来るとしたならば、イの衝立は牡丹色の光を受け、ロの棒に遮られたへの部分は、光の来ない所であるから黒い影になる。今(乙)(丙)を合併して考へて見るならば、白い光ハが来ても、牡丹色の光ニが来ても、ロの棒に遮られた影(ホ及へ)と云ふものは共に光が来ない所であるから、黒でなければならぬ筈である。扱て次に(丁)に移る。此の圖は(甲)に示した装置を、圖式的に現はしたもので、同時に又(乙)と(丙)を合併したものである。ホの黒い影にニの牡丹色が當るから、ホは飽和した牡丹色に見える。又への黒い影にハの白い光が當るからこれは鼠色に見える。然るに此のへの鼠色の周圍は悉く牡丹色であるから、色の對比の現象を生じて、其鼠色は牡丹色の餘色たる緑色に見える道理である。

ヘリングの色窓は、家庭の學術的遊戯としても、學校の教授用の標本としても、美しく且つ面白く、又簡單な色盲検査用としても便利であるから、家庭、應用の簡便な製作法を記して見やう。戊の圖のやうに、普通の兩戸にハとニと云ふ窓をあける(圖に示した點線の四角形)。次に1と2とに溝のある棧を造り、之の溝へハの所に磨り硝子を、ニの所に色硝子をはめる。此の圖では赤と青の色硝子を入れ、二色を混ぜて牡丹色を出すやうにしてある。此の磨硝子と色硝子を出し入れする爲めに、3の所で溝を少し切り下ける。ニの所にはめた色硝子をいろいろ取り替へたり組み合せたりすれば、好きな色を出す事が出来る。其組合せに依つて生ずる色の混合は、云ふまでもなく第十三章の光の混色法の1に述べた通りであ

圖 四 十 三 第



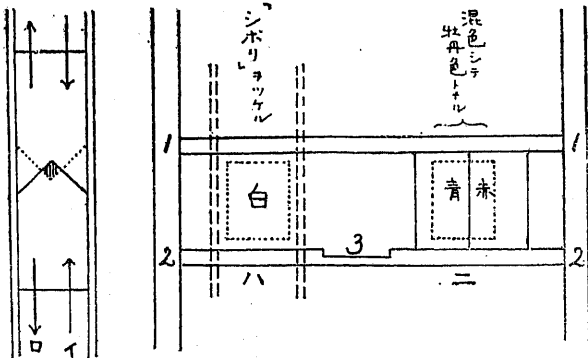
(甲)



(乙)

(丙)

(丁)



(己)

(戊)

る。次にハとニの窓の所に、各縦に(己)に示すやうな「しほり」を付ける。此れは寫眞機に用ゐる「しほり」と同じ原理に依つて造つたもので、己の圖のイのやうに兩方を近づけると穴が狭くなり、従つて其窓から入る光が弱くなる。又ロのやう

に兩方を離すと穴が廣くなり窓から入る光が強くなる。かうして大體の装置が出来れば、あとは(甲)のやうにして、ロの光を遮る棒と、イの衝立とを用意すれば、極めて容易に此の色窓の實驗を試みる事が出来る。

尙其他の方法としては、(6)ヘルムホルツやヘリングの二重像の方法とか、(7)ヘリングの兩室法とか、(8)同じくヘリングの消極的殘像法などがあるけれども、今は省いて置く。

二十五 對比を與へる色と對比を受ける色

對比の分類に入る前に、述べて置かなければならない事がある。それは光や色の中で、對比を與へる方と對比を受ける方とを、名稱の上で區別しやうと云ふ事である。これに二つの場合がある。

(一)鼠が牡丹色に圍まれて綠色に見えるやうな場合は、鼠は前景で牡丹色は背景である。此の場合には、前景なる鼠は對比を受ける色で、背景なる牡丹色は對比を與へる色である。(二)然るに同面積の白と黒とが並んだ場合などは、前景背景の區別がなく、白は黒を引立て黒は白を目立たせるのであるから、白も黒も共に對比を與へる方であり、又對比を受ける方である。此の意味で、(一)の場合には、前景の色即ち對比を受ける色、背景の色即ち對比を與へる色と云ふ名を用ゐる、(二)の場合には、たゞ對比を與へる色、對比を受ける色と云ふ名を用ゐる。

又此の現象は學者に依つて名の付け方を異にする事を注意しなければならぬ。ブリラケなどは此れをコントラスト(對比)と呼ばないで、インダクション(感傳又は誘導)と稱へて居る。此の呼び方からすれば、對比を與へる色を感傳色、對比を受ける色を被感傳色(又は感受色)と稱する。

二十六 光の對比

對比を分類するに二つの觀方がある。第一は對比の現象の現はれる光や色の性質から分類するもの、第二は對比を生ぜ

しめる方法からの分類である。先づ第一の分類を第一表にして次に掲げ、本章から二十九章に亘つて此の表に従つて有ゆる對比の種類を一通り述べて行かう。

第一表

對比なし	0
(甲) 光(即ち白・鼠・黒)の對比又は明度對比	1
(イ) 同調色の明度對比	2
(ロ) 色の感傳又は誘導(前景の鼠が背景の色の餘色に見ゆるもの)	3
(ハ) 狭義の色の對比	4
(a) 色の調子の對比(餘色以外の配列)	4
(b) 色の飽和の對比	5
(i) 飽和を増す場合(餘色同志の配列)	5
(ii) 飽和を減ずる場合(同調色の飽和の對比)	6
(c) 異調色の明度の對比	7
(乙) 廣義の色の對比	6
對比	7

右の表に示すやうに、對比は大體に於て(甲)光の對比と、(乙)廣義の色の對比とに分れる。

(甲) 光の對比は、白・鼠・黒同志の間の明度の對比を云ふので、之を示す教授用の標本は第二表のやうにして造る。(一) 白、(二) 淡鼠、(三) 中鼠、(四) 濃鼠、(五) 黒の五種の紙を、先づ背景用として四枚づつを大きく四角形に切り、次に前景用として同じく四枚づつ小さく四角形に切る。そして第二表のやうに、先づ縦に背景の紙を五行に各行四枚づつ合せて二十枚を貼り、次に横に前景の紙を五行に、各列四枚づつ合せて二十枚を貼る。對角線を作る所は、前景と背景と同一になるから貼る必要がない。

扱て此の第二表を見ると、對角線に最も接したものの、即ち1(背景淡鼠・前景白)、2(背景中鼠・前景淡鼠)、3(背景濃鼠・前景中鼠)、4(背景黒・前景濃鼠)の配合即ちIVは、最も對比の效果の少ない配列であり、對角線から最も遠い10(背景黒・前景白)、即ちIは、最も對比の效果の多い配列である。IVからIIIを経てIへ行くに従つて、光の對比の效果が増し、反對

表 二 第

	背景	前景	白	淡鼠	中鼠	濃鼠	黒
I	白	淡鼠	中鼠	濃鼠	黒	1	2
II	淡鼠	中鼠	濃鼠	黒	3	4	5
III	中鼠	濃鼠	黒	6	7	8	9
IV	濃鼠	黒	10	11	12	13	14

にIからII IIIを経て、IVに至るに従つて光の對比の効果は減つて来る。此のは配合の感情の方から「目立つ」「きつい」「いかつい」「げばぐしい」と云はれ、IVは「凝つた」「濼い」「おとなしい」「おとりした」など、稱される。IIやIIIは此の兩極の中間に位する。日常生活に於ては服飾として白襟、黒紋付は前者で、鼠の襟に濃鼠の着物は後者の例である。

二十七 同調色の明度對比と色

の感傳

次に(乙)廣義の色の對比は、(イ)同調色の明度對比と、(ロ)色の感傳と(ハ)狹義の色の對比とに分れる。

(イ)同調色の明度對比と云ふのは、同じ調子の色同志の間の明度の對比を示すもので、光の對比の場合の白・鼠・黒の代りに、任意の調子の色を用ゐる場合である。例へば今第二表の形式を採用して、鼠の代りに青を用ゐるとすれば、(一)白青、(二)淡青、(三)中青、(四)濃青、(五)黒青を以て同じやうな表を作る事が出来る。そして其對比の効果の形式は全く光の對比に就いて述べた事と同様であるけれども、内容は其上臺になる色が異なるに従つて變つて来る。例へば青の場合にはIVの組は「粹々

して濼く」、紫の場合には「濼くつて品格がある」。

(ロ)色の感傳又は誘導とは、前景の鼠色が背景の色の餘色に成つて見えて来る事である。茲に擧げた感傳と云ふ名稱は第二十五章に記したブリュッケの意味するやうな對比と同意義のものでなく、鼠が背景の色の餘色に見えて来る場合だけを

第三表

背景が赤ならば	前景の鼠は	淺黄に見える
〃	〃	勝色
〃	〃	青
〃	〃	紫
〃	〃	牡丹
〃	〃	赤
〃	〃	樺
〃	〃	黄
〃	〃	青
〃	〃	紫
〃	〃	牡丹

章の貼り物の影の色や、朝焼・夕焼の色や、電車の停留所や交番の赤い電燈の色などは、やはり上の第三表によつて淺黄色となる。又服飾としては、赤い帯の上に締めた鼠色の帯留は淺黄色に見え、夏の朝はづした蚊帳が白い敷布の上に懸つた時、白地の上の蚊帳は淡緑に、蔭に成つた白地の上の蚊帳は淡牡丹色に見える。白地の着物の上に色ヴェールを懸けたのも、此の例に入れる事が出来る。

二十八 色の調子の對比

(ハ)狭義の色の對比は、(ル)色の調子の對比と、(ト)色の飽和の對比と、(ニ)異調色間の明度の對比とに分ける事が出来る。

指して云ふので、丁抹のコーペンハーゲン大學教授レーマンの名稱を採用了のである。

色の感傳に於ける背景の色と前景の色との關係は、第五圖の餘色表に就いて知る事が出来るけれども、尙一應第三表に依つて之を確實に述べて見やう。但し此の場合には、前景の色は背景の色と同じ明度になる事が必要である。教授用の標本としては、ヘリンゲの色窓(第三十四圖)に及ぶものがなく、之に次ぐものは薄紙對比及び第二十六圖内の圓板である。日常生活に現はれる例は非常に多い。少し注意しなへすれば、誰でも之を發見する事が出来る。例へば第二十二章で説いた障子の棧の影の色や、夏の旅行に汽車の窓から眺めた緑の野原の前に立つ鼠色の電柱や石や柵などは、上の第三表によつて牡丹色に見える。同じく第二十二

(a)色の調子の對比と云ふのは、背景も、前景も、對比を與へる方も、對比を受け、る方も共に、色の場合で(但し餘色同志でない色の配列)である。今對比の影響に依つて背景の色が前景の色を變化する形式を、第四表に依つて述べて見やう。云ふまでもなく第四表は、第三表即ち色の感傳の形式から導き出される。

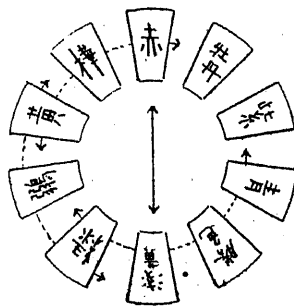
例へば赤地の上に黄色の模様を置けば、其模様の黄は鶺鴒を帯びて見える。これは第四表に示したやうに、黄が勝色に傾くからである。又緑の地の上に黄の模様を置けば、其模様の黄は樺を帯びて見える。これは黄が牡丹色に傾くからである。

第 四 表

赤の背景の上に或色を置けば其前景の色は或色+淺黄に見える					
樺	〃	或色	〃	〃	或色+勝色
黄	〃	或色	〃	〃	或色+青
鶺鴒	〃	或色	〃	〃	或色+紫
綠	〃	或色	〃	〃	或色+牡丹
淺黄	〃	或色	〃	〃	或色+赤
勝色	〃	或色	〃	〃	或色+樺
青	〃	或色	〃	〃	或色+黄
紫	〃	或色	〃	〃	或色+鶺鴒
牡丹	〃	或色	〃	〃	或色+綠

以上は背景の色が前景の色を變化させる例を示したのであるけれども、もつと之を一般的に云へば、色と色とが境を接して並んだ時には、各の色が共に對比を與へる方と、對比を受ける方となる。例へば綠と青とが並んだ時には、綠は青の爲めに變化されて、綠に黄を加へた色即ち鶺鴒になる、青は綠の爲めに變化されて、青の牡丹色を加へた色即ち紫に傾いて来る。

圖 五 十 三



此のやうに、二色が相互に變化し變化される關係を、最も簡便に知らせるのは第三十五圖である。今此の圖に依つて一二の例を述べて見やう。赤と黄とが並ぶとすれば、赤は黄を押し向うへ遣り、黄も亦赤を押し退けると考へて見る。黄

は赤に押されて、圖のやうに隣の色の鶉に傾き、赤は黄に押されて隣の色の牡丹色に傾く。緑と青とが並ぶ時も同様である。緑は青に押し退けられて鶉に傾き、青は緑に押し退けられて紫に傾く。(二色の關係が樺と鶉のやうに同明が等しい時には色の調子の對比丈けが起るけれども、緑と青のやうに明度に差がある場合には、色の調子の對比の外に、後に述べる(c)異調色の明度の對比も共に起る事を思はなければならぬ。)

此の色の調子の對比は、日常生活に於ては、染め色と繪畫の配色とに最も多く現はれる。呉服店で染色する場合に、顧客が赤地の上に在つた模様の黄色を見本にして、新たに緑地の上に其通りの黄色を染めるやうに命じたとする。呉服店の染色部では、同一の染料を用ゐて緑地の上に此の模様を染めて仕上げて客に届ける。しかし之を受取つた注文主の眼から見れば、出来上りの色は決して注文した見本の色と同一でない。其理由は第三十五圖に示すやうに、同一の黄でも注文した時は赤地の上に在つたから、黄が鶉色に傾いて見えた。然るに今出来上りの模様の色は緑地の上にあるから、黄が樺に傾いて見えるからである。客は鶉に傾いた黄を注文して、樺に傾いた黄を得たのであるから、仕上げの色が見本の色と違ふ事を呉服店に責めるのも無理はない。實際較べて見れば誰の眼にも其相違が明瞭に分るからである。しかし呉服店の染色部にしても、全く前と同一の染料を用ゐる、全く前と同一の手續を執つたのであるから、決して注文に外れた染め方をしたのではない。此の事實は染色の學術的の取扱の上から、最も確實に證明する事が出来る。客と染色部との間に起つた此のやうな怪しむべき、しかも餘りに明らかな矛盾は、どうして解決されるであらうか。

實際に於て此の問題が、八十年ほど前に、佛蘭西のゴブラン會社に起つた。此の世界的の會社の染色部の主宰者は、有名な應用化學者シユヴァリールであつた。氏は顧客と染色部員との争を捌く爲めに努力した結果として、此の色の調子の對比の現象が始めて明瞭にせられた。氏は内側の黒い圓筒を以て、其模様の部分丈けを覗いて、客の注文した見本の色と染色部で仕上げた色とを較べて見た。即ち地色が模様に與へる影響を全く除いて、單獨に純粹に模様に色丈けを觀察した。此のたくましい思ひ付きが客と染色部員との不思議な争を美事に解決して、各々の言ひ分と主張とに共に満足を與へた。

圓筒を以て覗いて地色の影響を除いた時の模様の色は、全く染色部員の辯明を裏書きしたし、圓筒なしに地色の影響を存せしめた時の模様の色は、全く客の主張を證明するものであつた。此の事件から、染色部員は、客の注文を受けた時には色の調子の對比と云ふ現象を勘定に入れて染めなければならないのであると云ふ事が分つて來た。此の時（一八三九年即ち我が天保十年）に出たシヴリユールの著書『色彩の同時對比の法則に就いて』は、色彩研究殊に對比に關する有名なるクフシツクとして知られて居る。

二十九 色の飽和の對比

(b) 色の飽和の對比は、二つに分けて見る事が出来る。(i)は對比に依つて色の飽和を増す場合、(ii)は對比に依つて色の飽和を感ずる場合である。

(i) 對比に依つて色の飽和を増す場合は、餘色同志を並べるか、又は餘色同志を以て前景の色と背景の色とを作るかの場合である。第三十五圖に就いて述べるならば、餘色同志の赤と淺黃とを並べる時には、赤は淺黃の爲めに一層其飽和を増し、淺黃は赤の爲めに一層飽和を増して來る。其他の餘色同志の色に就ても、之と同様である。

第十章「色彩感覺系統の第二方面―飽和」の所で「尤も飽和は殘像や對比を利用すれば、更に其度を増す事が出来る事を知つて居なければならぬ」と述べた。これが丁度今述べて居る飽和の對比に當る。即ち對比に依つて飽和が増すのである。

飽和を増す對比の二色は、反對色の配列であるから、之を色彩感情の上から評すれば、光の對比の白と黒との配列と等しく、「目立つ」「きつ」「いかつい」「けばぐし」「ものばかりである。此の配列は刺戟が強すぎるから、少時の鑑賞には適するけれども、長く見て居ると飽きて堪へられなくなる憂がある。服飾としては、日常生活にも用ゐるけれども、殊に演劇の衣裳に多く用ゐられる。例へば赤と淺黃の配列は襦袢と襟に多く用ゐられる。樺色の著物は演劇ではよく強い人

(荒事)や憎まれ者(實惡)に用ゐられるが、其時の袖口や袴にはよく勝色が用ゐられる。青の地色の着物には、黄色の扱帯しんぎが締められるし、金色に類した帯も用ゐられる。紫の着物に鶯の帯も、緑の著に牡丹色の帯も、一般に用ゐられる。(二色の關係が赤と淺黄のやうに、明度が殆ど等しい場合には、飽和を増す對比丈けが起るけれども、黄と青の二色のやうに、互に明度の差が等しい時には、飽和を増す對比の外に、(一)に説く異調色の明度の對比も共に起る事を考に入れて置かなければならぬ)。

(ii)對比に依つて色の飽和を減ずる場合は、前景に不飽和色(不飽和色に三種の別のある事は第六圖参照)を用ゐ、背景に同じ調子の飽和色を用ゐると、前景の不飽和色は飽和を失つて、白鼠又は黒に傾いて見える事を云ふのである。例へば飽和した赤を背景として、其上に非常に淡い赤を載せると、其淡赤は飽和を失つて白に傾いて見える。又飽和した緑の地の上に、非常に濃い緑を置けば、其濃緑は飽和を失つて黒に傾いて見える。以上の二つの場合、即ち不飽和色として淡い色と濃い色を用ゐた場合は、同調色の明度對比が共に起つてみることを知らなければならぬ。故に此の二つの例は本來は同調色の明度對比の例として擧げる事も出来るのである。たゞ此處で之を説けば飽和を減ずる對比と云ふ方面が重く見られ、彼處で之を述べると同調色の明度の對比と云ふ方面を主とする事になる。然るに第三の例として、飽和した青の背景の上に青が非常に鼠の方向に不飽和に成つた色(即ち鼠青、しかも背景の青と同明度のもの)を前景として用ゐれば、其鼠青は飽和を失つて、鼠に傾いて見える。しかも此の場合は青と鼠青とは同明度であるから、前の二つの例のやうに同調色の明度の對比が起らずに、純粹に飽和を減ずる對比のみが見られる。

斯の如く、飽和色の上に同調の不飽和色を載せると、何故に其不飽和色が飽和を失ふかと云ふ理由は、第二十六章の第三表によつて直ぐ理解される。即ち——鼠の背景の青に飽和した鼠青を載せると、鼠青は飽和を失ふから、鼠に傾いて見える。然るに反對色の原理に依つて青と黄とが消し合ふから、其結果は鼠となる道理である。

これは前の(i)の飽和を増す場合と正反對のものであるから、服飾や繪畫や裝飾の配色の上には彼と此とを合せ用ゐて

一層の効果を擧げる事が出来る。

(c) 異調色の明度の對比とは、色調を異にした二色の間に生ずる明度の對比を云ふので、其關係は第十圖の曲線及び第十三圖の縦軸の上下の位置に依つて明かにされる。第一の例として、樺と鶯や赤と緑や、勝色と紫などは、色紙に依つては互に明度の差が殆ど無いから、色の調子の對比は起るけれども、明度の對比が起らない。第二の例として、赤と淺黄も色紙に依つては明度が等しいから、飽和を増す對比は起るけれども、異調色の明度の對比は現はれない。然るに、第三の例として、綠と青や、黄と赤や、赤と青や、黄と綠などが並んだ時には、一方は明るく一方は暗いから、これは色の調子の對比と共に、異調色の明度の對比が起つてゐる。又第四の例として、黄と青や、鶯と紫や、樺と勝色などが並んだ時には一方は明るく一方は暗いから、これは飽和を増す對比が行はれると共に、異調色の對比も現はれてゐる。故に異調色の明度對比と云ふ現象は、單獨に現はれて來るものではなく、必ず他の對比を伴つて起るものである。